

### 二一世紀の企業活動の成長を支えるイノベーション

偉大な経済学者が意外な私生活を過ごしていたのを知ること、難しい理論に親しみが持てるようになる。今回はシュンペーターの読みやすい伝記を取り上げてみたい。

企業はイノベーションを続けなければやがて競争に敗退し市場から淘汰される。二〇世紀の企業の成長は企業規模の拡大や業務範囲の拡張によりもたらされた。しかし、二一世紀の企業成長は、市場の激しい変化に対応しイノベーションを生む、簡素で俊敏な組織によりもたらされる。「ビジネスウィーク」四月二八日号は世界の最もイノベティブな会社五〇社を特集している。一位はアップル、二位グーグル、三位にトヨタが入っている。イノベーションとは、アップルのように新製品を開発するだけでなく、グーグルのような新機軸の顧客サービスを行ったり、トヨタのように生産プロセスの仕組みを改善したりすることである。イノベーションⅡ「創造的破壊」の預言者シュンペーター

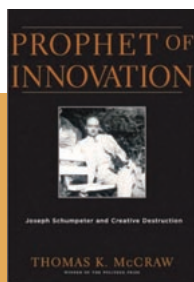
したががシュンペーターであった。一八八三年ウィーンに生まれ世紀末の時代転換の雰囲気の中で青春を送る。一九〇五年に最初の論文を世に出し、やがて偉大な経済学者として認められる。一九三二年にハーバード大学に移り、一九五〇年に逝去するまで精力的な著作活動を続けた。一九三二年には東京商科大学（二橋大学）などの招きで日本を訪れ日本の経済学に大きな影響を与えた。

没後六〇年近くたち、一般の経済学が経営者には役に立たない技術的な学問となる中で、イノベーションの思想家シュンペーターが再び注目を浴びている。シュンペーターによれば、企業家がリスクをとりイノベーションを遂行することで経済に破壊的発展の契機が生まれる。イノベーションには、「新しい財貨の生産」「新しい生産方法の導入」「新しい販路の開拓」「原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得」「新しい組織の実現」があるとされた。

①はハーバードビジネススクールのビジネス史名誉教授でピューリッツァー賞受賞者のマックロー教授の手になる、シュンペーター伝の決定版ともいえる大著である。シュンペーターの業績を現代的視点で見直すだけでなく、彼の驚くほど生産的な著作活動の背景と、三度の結婚を通じたロマンティックな生活面を関係者の日記や手紙などの新資料をベースに興味深く生き生きと描き出し、興味が尽きない本だ。

②は日本の正統派経済史学者の根井京大教授がビジネスマンや学生用に出版したコンパクトで読みやすい思想と生き方の紹介書だ。そこで根井教授はシュンペーターのパラドクス論を展開する。一つは、偉大な「経済理論家」として後世に評価されることを願った彼が、偉大な「社会経済思想家」として評価されることになったというパラドクスである。「創造的破壊」とは資本主義の合理性の浸透が過去の伝統や制度を破壊し資本主義のシステムが機能不全に陥るといふ主張なのだが、その結果、現代資本主義に経済的合理性だけでは測れない非経済要因の複雑さと多様性を考える必要が出てくるという重要な問題を提起することになった。もう一つのパラドクスは、颯爽とした孤高の経済学者の姿と、実生活では女性関係に右往左往するといふマックロー教授がより具体的に今回の自伝で明らかにした姿であろう。

いずれにしても、シュンペーターは「創造的破壊」の主体としての「企業家」の役割という現代的経済活動を定式化したことで、二一世紀の企業活動に最も影響力を持つ経済思想家といつていいだろう。



① **Prophet of Innovation**  
Thomas K. McCraw  
The Belknap Press of Harvard University Press / 2007



② **シュンペーター**  
根井雅弘  
講談社学術文庫 / 2006年1月